

中龜
村井
光勝

夫郎
福田恒存集

昭和文学全集

(16)



昭和二十八年六月二十五日 初版印刷
昭和二十八年六月三十日 初版發行

昭和文學全集 16

龜井勝二郎
中村光夫
福田恆存集

著者

龜井勝一郎
中村光夫
福田恆存

發行者

角川源義

印刷者

小田茂作

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クローズ 日本クロス工業株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 徳住製本所

龜井勝一郎
中村光夫
福田恆存集

昭和文學全集
角川書店版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

巻頭寫眞
龜井勝一郎
中村光夫
福田恆存

龜井勝一郎集

筆蹟

人間教育

イタリアへの旅

ワイマールの嘆き

漂泊者(古代的・近代的)

異教徒

ローマ

信仰について

信仰の無償性

愛の無常について

罪の意識について

- 一 人間崩壊
- 二 本能的な理性的な
- 三 美を創造する者

聖徳太子

上代思想家の悲劇

大和古寺風物誌

法隆寺

初旅の思ひ出

金堂の春

薬師寺

春

塔について

東大寺

大佛殿にて

不空羅索觀音

美貌の皇后

美貌の皇后

中尊寺

吉野の山

古塔の天女

箴言

解説

年譜

中村光夫集

筆蹟

風俗小説論

— 近代リアリズム批判

近代リアリズムの發生

— 風葉・藤村・花袋

近代リアリズムの展開

近代リアリズムの變質

近代リアリズムの崩壊

— 横光・武田・丹羽

異邦人論

二十世紀の小説

六 四

武田泰淳 二三

二四

七

七

七

八

八

八

八

九

九

九

一〇

一〇

一〇

二〇四

一七

一六三

一四

一五

一三

笑ひの喪失

—近代日本文學の一性格

二〇四

戦争まで

三三四

ロアルの宮殿

三三四

ロッシュの城

三三四

ルネッサンスの宮殿

三三〇

シユノンソーの離宮

三三九

ジイドへの手紙

三〇三

解説

大岡昇平

二四五

年譜

二四七

福田恆存集

筆蹟

藝術とはなにか

三二五

—藝術と文明—

1 呪術について

三五一

2 呪術の現代的考察

三五六

3 演戲といふこと

三二五

4 演戲精神の衰退

三二六

5 選民の藝術

三二六

6 辨證の藝術

三七一

7 意匠の藝術

三二五

8 視覺の優位

三二七

9 カタルシスといふこと

三二〇

10 ふたゝび
カタルシスについて

三二七

11 藝術とはなにか
—結論として

三二九

あとがき

三二七

作家の態度

芥川龍之介

1 文學史的位位置について

三二九

2 比喩について

三〇一

3 風景について

三〇五

4 文體について

三〇九

5 古典と現代について

三二二

6 文化意思と
虚無思想について

三三八

7 暗鬱地帯について

三三四

8 無抵抗主義について

三三九

9 詩的正義について

三三四

龍を撫でた男(戯曲)

三三三

無償の讀書

三二九

諷刺の地盤

三三三

解説

三島由紀夫

三二九

年譜

三二二

龜井勝一郎集

五
十
五

五
十
五

五
十
五

五
十
五

五
十
五

人間教育

イタリヤへの旅

ワイマールの嘆き

「疾風怒濤の時代」に人間生涯の運命が決定される。人間の最も重要な時期はその發育時代とみたゲエテは、だから自傳（詩と眞實）の中で幼年・少年・青年をのみ扱つて、それ以後を單なる年代記風とするにとどめた。壯年から晩年にかけてのあの宏大な事業を惜しげなくきりすててしまつた。これほどまで自己の青年時代に信頼をおいて描いた自傳はおそらくあるまい。しかし、「詩と眞實」が老ゲエテの作であることは深く注目し價することだと思ふ。青春の回想が、かくも寛容にみち、悔恨の苦痛におほはれてゐないのは、老年の筆なればこそであるまいか。この自傳の四つの部（I-IV）に附せられた次の言葉は非常に意味ふかい。

第一部——「懲らされてこそその教育である。」

第二部——「人が青春時代に願ふものは老年の時代に於て充たされる。」

第三部——「樹木は伸びても天まで達しえないことになつてゐる。」

第四部——「神を措いて他に神に敵する者なし。」

豊饒な老年のみがかゝる言葉を發しうるのてなからうか。一の壯大な樹木として成熟しきつた後、はじめて「天まで達しえない」自己の運命を諦観し、神を措いて他に敵するものなきことを知る。かういふ時、己の若き日を顧み、それが一個の植物の萌芽と成長と變様であることを靜かに眺めるがよい。希望の日の若々しい焦慮を、充足の晩年に喜悅をもつて祝福するがよい。「詩と眞實」は王者の如き充足の日の筆であつた。もしゲエテが「疾風怒濤の時代」につゞく壯年への過渡にこの自傳をかいたとしたならば、果してかやうな充足と靜謐を保ちえたかどうか。むしろ慘忍に自己の青春を空しいと嘆じたかもしれぬ。幾多のものを未來に豫期してゐる青年から壯年への過渡に、自己の運命を決定されたものとして認めることが出来るか。どんな豊饒も彼にとつては不足である。若き日を完き喜びに満ちて回想しうるものは老年のみ。人生の眞晝に向つて進む青年にとつて、過ぎし日を満足の微笑で眺めることがどうして出来るか。自らを神とした一人、天まで達することを願ふもの、さういふ焦慮にとつて、過去はたゞ苦痛に堪へない悔恨の連續でなからうか。

「疾風怒濤の時代」を青春の午前とするならば、それによつて私は青春の午後の状態とも名づくべきものを考へたい。混沌とした無我夢中の行爲とあらゆる感受性の浪費と、この午前をとほつて人はやがてそれを反省する時が来る。二十代との訣別は青年にとつて極めて重要な一時期だと思はれる。三十歳とは何か、私はさきにも一度かいた。迷夢との訣別。薄明の中に無意識に過した魂を、鋭利な反俗的武器にまで鍊磨するところの、悔恨と復讐にもゆる決意の日。浪費に對して一の抑制が考へられる。自我の放蕩に對して冷靜な客觀世界が到來する。普通の言葉でいへば「彼は世の中へ出る。」そしていゝ意味でも悪い意味でも社會的に訓練される。孤獨な彷徨といふ形態での戦ひから、社交と實務の最中における戦ひへと轉化する。この時、人は改めて青春の午前を思ひ出すであらう。「疾風怒濤」と誇りうるものが果して自分にあつたか、自分は午前を完璧に生き抜いたか、かやうな自問が始まる。そして答へはつねに否定的であり、否定的でなければならなかつた。たとへ見事な「疾風怒濤」を経たとおぼろげに感じても、その青春の感じは自己を欺くことを知る。これがどんな苦痛をもたらずものか、詩人は知つてゐるであらう。詩人は決して過去の光榮を説かぬ。むしろ悔恨だけがある。すべては遅いと思ふ刹那ほど自我を苦しめるものはないのだ。こゝで或る者

は戦ひを終結せしめ、世俗へ轉落してゆく。

だが否定の苦痛は、ある意味で運命への抗議であり、もえ盡きざる青春の證明でなからうか。再度、美への豫感に襲はれ、新しい戦闘を準備する。この戦ひを、孤獨への憧憬において、しかし實際には社交や實務や職業、それから外部世界の摩擦において成就しなければならぬ。「疾風怒濤」の時代とは別の危機が存在する。

「若きエルテルの悩み」を發表後、ゲエテはカール・フウグストに迎へられて、ワイマールに到つた。それから十年間（一七七五—一八五）イタリアの旅にのぼるまで彼はこの種の危機を生き、そして征服したと考へたいのだ。こゝに注目すべき一つの告白がある。

「私の眞の楽しみは詩的な冥想と詩作とであつた。しかしながらこれもまた私の外的な地位のためにどんなに攪亂され、制限され、妨害されたらう。若しもこの公の職務上の仕事からもつと遠ざかり、もつと孤獨に過すことが出来たら一層幸福であり、又詩人としても、更に多くの事をしたであらう。しかし『ゲッツ』と『エルテル』を書いた後まもなく、一人の賢人の言葉が私において實證されねばならなかつた。人が、英世間のためにやるな事をしたら、世間はそれを二度とさせないやうにするものだといふのだ。」

一八二四年、ゲエテはかく語りつ、「わが七十五年間を通じて眞に楽しかつたのはその一月となかつたと言つてもいゝだらう」と述べた。かやうな嘆きは、既にワイマール到着後幾許もなく始まつたやうである。「疾風怒濤の時代」を純粹に生きたものは一の不幸を擔つたも同然である。青春の午前は、エルテルの如く、感受性の處女性を抱いたまま、瞬時にして死すべきものなのだ。純潔を純潔のままに埋葬する日に彼らの勝利があつた。しかし生きて行くにすればどうなるか。純潔は無慘に地にまみれる日が来る。ファウストIIグレントへん悲劇のやうに、自己の内部と外部において最も殘酷に處女性をふみにじる日が来る。「疾風怒濤の時代」とは戀人と遭遇の喜びの日であるとともに、この嘆きの日であつた。詩人のみがこの日に課せられた責任を知つた。「今となりてはきみがため、花環つくとと薔薇を摘むこともわれはせじ。戀人よ、季節は今も春にしあれど、悲しくも秋の思ひぞこゝろに充てる」(「別離」)最後の一聯)とゲエテは、はげしい別離の日を歌つてゐる。

外部的には「公衆」といふものが詩人の周圍をとりまいてくる。青春の驚くべき浪費によつて「エルテル」が生れたとき、公衆はそれを享受しつゝ、更なる浪費を詩人に迫つた。優れた處女作に對し公衆は必ず「もつと」と言ふ。執拗に要求する。かうした公衆(ワイマール宮廷もその一部)が詩人を浪費する。情熱なしにこの要求に妥協したとき、彼らはや詩人としての生命を失つて行く。ゲエテはこの種の苦しみを無限に味はつた。悔恨は二重となつて彼を襲つた。青春の純潔を喪つた悲しみと、その悲しみの上に歌はれた作品と、それも再び歸らぬ。「エルテル」は二度つくりらるべきものではなかつた。しかしこの狂氣を絶えず心の中に再生せしめなかつたら、詩人は一體何ものであらう。ワイマールの激情と放逸と實務と社交と政治と、あらゆる煩瑣な宮廷生活が始まつてゐた。「疾風怒濤の時代」の純粹さが喪はれてゆく。ゲエテの偉大の一は、この純粹性を護るために現實の過重を回避しなかつた點に、いな、現實の過重のうちにこの純粹性を再生せしめたこと、まづ大膽な生活者となつた點にあるのではなからうか。彼の行爲はつねに半ば無意識な衝動であつた。「おんみ更に遠くさまよひ行かんとするや……」一の危険な航海が豫定されてゐた。ファウスト的實踐が試みられる。尤も、この生活が高貴で古典的表現をえたのは、はるかに後のことであつたが。

ワイマールとは何か。それは運命がゲエテにもたらした一の實驗室——國家といふ複雑な有機物をとり扱ふところの——であつた。テウリンゲンの田園都市、人口僅かに六千、

牧畜とさゝやかな農業以外に何もない憐れむべき公國の首都。三十人の宮廷人と三百名の軍隊。ワイマール公の血統に在る教養への高い欲求が、辛うじて一種の文化を成育せしめつゝあつたに過ぎない。これは事實である。

かういふところでゲエテの政治的才能や自然科学的欲望や劇場指導やその他あらゆる實務と社交とを過大に評價するのは滑稽なことかもしれないのだ。しかし、詩人は實驗室において、貧しい材料から巨大な典型を容易に想像するものである。ゲエテは生涯をワイマールに送つたが、ふりかへつてみると、彼がこの小規模な社會機構からいかに大きな人類社會を夢みたかがわかる。單なる寫眞あるひは模型を眺めることによつて、その原型のあらゆる状態を生々と想像したカントのやうに、ゲエテもまた一介の地方政治家の資質から古代の英雄を夢み、みずばらしい土木事業からスイス運河の開鑿に想ひ及んだ。それを感情として生きた。これはワイマールの詩である。そして我々は詩によつて眞實を知る。尤も實驗室の微小が彼を制約した場合も考へられよう。が、ゲエテは、この環境にあつて、隔りまでも生活し、才能を多面的に浪費し、かくすることによつて環境に戦ひを挑みつゞけたことがいまは大切である。この挑戦はより高きものへの憧れ、努力であつた。私は傳記によつて彼のワイマール生活を知るよりもこの挑戦の記録たる詩と作品によつて彼のワイ

マールを知らうと欲す。

多くのゲエテ論は、「詩人の詩的血管は、ワイマール在住の最初の十年間は枯渇した」といふ點で一致してゐる。フアウストもエグモントもイフィゲニエもタツソオも、未完成のまま放置され、ゲエテは詩人として振舞ふよりも、まづいかにして荒れ狂ふ己を公國の生活に適應せしめるか、自己統御を學ぼうとしてゐるかにみえる。「イルメナウ」にみられるごとき「疾風怒濤の時代」から、やがて公的生活人として、大公の教育と君主政治の合理的確立に腐心する。俸給千二百タレル。議決權を有する樞密外務評議員、道路工事委員會、財政委員會、建築土木事業、營林、鑛山業のそれぞれ指導、また兵事委員として自ら徵兵事務を行ひ軍隊編成を試みた。また「小國の政府は家長的」であるから、近郊に失火のあるときは現場に馳せ參じて消防を指揮する。あるときは委員會の議長となり、あるときは劇場の監督を、また植物學・礦物學の研究、造型美術の蒐集、それから「遊戯と踊、談話と芝居が、われらの血を爽かにする」。(ワイマールの快活な人々) これらの生活に一貫してゐるものは、驚くべき健康と明朗性、些の疲勞をも、伴はない光の如き生の歡喜。われをして能ふ限り生活せしめよといふ、強烈な生活慾である。フランクフルト市民の子は、かうして一の貴族・宮廷人として成長して行つた。「ゲッツ」や「エルテル」

に比ぶべき作品が生れなかつたにせよ「詩人が失つたところを人間が獲得した」とすれば、この十年間の意義は非常に深いと云へるだらう。これは事實である。そして風俗説となつてゐる。

端的にいへば、詩人が失つたところを人間が獲得した、このまぎれもない優秀な事情の上に立つたゲエテが、己れの空しきを感じたといふ、その悲しみに重大問題があるのではないか。實生活を回避することなく、その一切の些事を生きながら、そのなかに在つて自己の再生を索めた事情。嘗つて「政治が文學か」が論じられた頃、私は「藝術的氣質としての政治慾」といふエッセイをかき、そこでゲエテの政治生活(作家以外の多面的生活)の意味を辿つてみたことがあつた。藝術家は、いかなる意味においても専門家ではなく一の綜合的人間であり、その對現實への執拗な浸透が、彼を政治や自然科学や商業等に迂回せしめる。關心の深さ、夢の深さとも云ふべきか。しかしこの迂回のひとつひとつに停止しえないところに——もし停止すれば彼等は藝術家でなくなる——作家の變轉における危機とその悲劇が存在する。藝術的氣質としての政治慾も、畢竟それが他の藝術の大いさを結果において保證するものとして、作家の必須條件であり、たとへ誤謬と動搖にまみれたものであつても、作家の社會的教養としてみるとき、全く安當なものである。しかし、大

切なことは、様々の領域への作家の没入が、誠實であり、徹底的であればあるほど、それが「作家の教養」といふ目的のための手段とはならず、その領域の仕事自體が自己目的的に把握されるといふことである。だからこそ、こゝに作家の危機を云々することが出来る。

ゲーテの多面的生活が、全人間 (Ganz Mensch) としての成長過程だったことに間ちがひはなからう。全人間への深いあこがれから、私は前記の評論で、ひたすら多面的生活の光彩への幻惑から筆をすゝめてみた。そして、作家の危機と自ら呼んだ點について、あまり立ちいつてゐない。その點を今改めて考へてみよう。ワイマールにおけるあの豊かな光彩にみちた生活の背後に、ひそかな苦痛が忍び寄つてゐなかつたらうか。その苦痛とは詩の危機でなかつたらうか。ゲーテがワイマールの政治家・自然科学者たることによつて、詩人を永遠にやめたなら、一體彼は何ものであつたらう。彼が全人間たる意味は、あらゆる多様な生活と事業の中に、強靱な詩を所有してゐたからではないか。詩の喪失を自己の死と感じたからではないか。人間のより高きものへの轉身が、眞の轉身となるのは、「抒情のエスプリとしての智習」によつてのみ可能である。純粹性を消極的にまもる爲に大膽な生活者たることを拒否しなかつた彼は、大膽な生活者たる所以をもつて、詩

の喪失を合理化しなかつたこと、エルテルの狂氣の失せてゆく青春の午後を、最大の苦痛をもつて生きたこと、危機を判然と危機として受けたこと、——ワイマール生活の底にこの苦痛と爆發をみないでよいだらうか。夢みがちな「疾風怒濤の時代」は過ぎた。ワイマールに到つたゲーテは、その時に比べてはるかに多くのものを所有してゐた筈である。詩人としての名譽、高貴な社交、豊富な生活、高い地位、そしてシュタイン夫人、にも拘らずそのすべてが、自己を蝕む一瞬一瞬を感じ、何ものをも所有しなかつた日へのあこがれが芽生えてゐた。

青春の午後が我々に與へる最大の苦痛は、自己の天分・資質に對する懷疑である。「疾風怒濤の時代」の無意識で純潔な薄明をあこがれても既におそい。無意識なものを意識する日ほど苦しいときはない。意識したところで再度實現できるものではない、また意識することは過ぎし日のむなしさを知ることでもある。孤獨な自由な彷徨の日は過ぎ、様々な世のわづらはしさが我々をとりまく。そのやうな現在もまた空しく情熱の衰微を思ふ時がある。詩神から完全に見放された自己を感じない日があるらうか。二十代への訣別とともに襲つてくるこの危機、悔恨の苦痛から逃れたいばかりに、人は自らを欺くさまさまの口實を考へるものだ。詩人はこの危機に對して峻烈に、あまりにも峻烈に自他を監視しなけれ

ばならぬ。いさゝかの經驗と世間智が彼を欺瞞へつきおとしてしまふから。たとへば進歩主義——實生活を尊重せよと叫ぶものに對して、それが彼の藝術的才能のみすばらしさを隠蔽する結果とならぬかを識別するがよい。嘗つて牢獄につながれた經驗、自分が貧乏してゐるといふ事實、それらの露出によつて、門前の乞食が憐みを乞ふ如く、己の藝術的貧困の辯解を試みようとするものを警戒するがよい。態度の誠實と眞面目さ、政治的經驗、實生活の苦難、それらが必ずしも美的感覺の窮乏を償はぬといふ冷酷な事實を直視しなければならぬ。つまりあらゆる感傷性を棄て去ることによつて、この危機は正體をあらはすのだ。(態度の悲愴は偉大に屬しない。……すべての繪畫的な人々に對して警戒せよ)(Ecce Homo)

彼が偉大な殉教者、革命家であるといふそのことによつて、彼の詩を詩とみなすことは出来まい。ワイマールにおけるゲーテの全政治活動を賞讃することによつて、彼の詩の枯渴を甘やかすことが出来るだらうか。彼自身眞ッ先にそれを己に向つて拒絶してゐる。最もすぐれた社會生活者、輝かしい未來の闘士でさへ、詩神の前には峻烈な審判を経なければならぬ。詩人はその審判を最大の英雄に對しても要求すべきである。全社會が拒絶しても詩人は藝術でないものを藝術でないと言

ひきらねばならぬ。ゲエテの偉大さは、彼の社会的地位と多面的な才能にも拘らず、詩神の退化を最大の悲しみて自覺した點にある。更に云へば、公的生活を無視せず、それを生きぬくことによつて、これと詩神とを相剋せしめた。詩ばかりが尊いとは限らぬ、行爲の生産力もあると一つの聲は叫ぶ。同時に、卓越した社交と英雄的手腕と政治的卓見と廣い人生智と、しかも只一つ詩を喪つてゐる人間が文學の前において何であるかと呪詛する聲もある。「タツソオ」はこの相剋のうちに生育した。

公女レオノーレの言葉がある。「英雄と詩人とは互に親しきもの、互に相求めあふもの……歌に誦はれるほどの事業をすることも天晴れには違ひありません。しかしその事業の力強い豊かさを、それに劣らぬ歌に作つて後世永く傳へるのもまた限りなく美しい。」互に相対する二つの資質、二つの能力、二つの性格、それが反撥することなく渾然と融和した彫塑を、月光のごとき愛が照らす。かういふ境地はイタリア旅行以後のことであつた。それ以前に、ワイマールにおける長い醜醉期間がある。タツソオとアントニオの激烈な對立。それはやがてゲエテの内部における政治家と詩人との對立を思はせる。悲劇「トルクワトー・タツソオ」が描かれる前に、ゲエテ自身がワイマールのタツソオでなければならなかつた。そしてそれ以前にゲエテはアント

ニオでなければならなかつた。

「自分の中に籠つてゐては中々自分がわからぬ。自分自身の物差次第、或は自分を小さく量り過ぎたり或は大抵の場合、困つたこととはかく大きく見積り過ぎるのが通例です。人間は人間においてのみ自己を理解します。たゞ世の中のみが、各人に對してその自我を教へるものです。」(アントニオ)こゝにワイマール生活の一つの要約がある。「疾風怒濤」から漸く脱けて、廣い人生に身を處して行つたものの言葉、おそらくゲエテの體驗の告白であらう。アントニオは毅然として國政に參與する老練高潔な人格であつた。ところが、この人格に對し詩人タツソオは一の狂氣であつた。エルテルの狂氣をもつて彼は挑む。

詩人は鋭敏無比の感受性においてのみ生き運命を生れながらにして擔ふ、荒々しい世の流れと一切の世事に對して、あまりにも氣まぐれて傷つき易い。敏感な性質はことに破れる。詩人はみな先天的失戀者であり、環境上の弱者であつた。彼は何かに深く傷つて生きている。云はば没落によつて一つのものを生をあがなふのだ。従つてそれは拒絶を知る精神である。何かを拒絶しなければならぬ。こゝに弱さのもつ一種の強さ、受動的抵抗ともいふべきものが生ずるのは當然でなからうか。自分の明日的存在など考へない、身を捨

てこそ浮ぶ頼もあれと云つた戰鬥力、鋭利な知性をふくむ感受性に必然する否定的精神、そして最後に滅びゆくものあはれ、さだかならぬ感情、そのエーテル的旋律が幽微に奏せられる。さういふところに論理と定見と秩序を無視した戦ひがあつた。タツソオの錯亂、猛然たる支離滅裂の反響、この深い苦痛は、ゲエテ自身の體驗されたいまひとつの情熱、ワイマールのアントニオの運命への抗議でなくて何であらう。ワイマールの政治生活、社交生活が人間としての自己教育完成であつたにしても、それを貫く詩神の招待に、狂はんばかり焦慮した日があつたのだ。

ある場合何かを犠牲としなければならぬ。ジイドは「タツソオ」に熱狂しつゝ云ふ。「この對話のうちには、二つの世界が相對峙してゐる。行爲が夢想に、純粹な觀點に對立する……そして私はゲエテを全生涯にわたつて、この對立を見出すことを好んだ。彼が巧みに自己のうちに存續せしめたこの對立は、彼をしてたゞ鬭争そのものうちにのみ満足を見出し、安息を渴仰することなく、死そのもの以外の安息を許さぬに至らしめたのだ」(ゲエテ)と。ジイドの全人間への憧憬であらう。この大いさを思ふ日は私には幾度か訪れてきた。しかし「すべての頂には憩ひがある。」その無限に深いあこがれに向つて、ひそかな苦痛を噛みしめ、ゲエテといふアントニオの内部にタツソオの慟哭がひびいてゐた

日が、今の私には近いのだ。このタツソオの悲しみを自身に呼び寄せたいと希ふ。驚嘆すべき健康とハイテルカイトを伴つた宮廷生活の影から、屢々悲しみあふれた詩が歌はれてゐたことは意外である。「獨りゐて常に泣けども、人とゐて、いと晴れやかに、樂しげに振舞ふわれぞ……」(An Mignon) 孤獨な詩的瞑想と詩作、この僅かの時さへなかつたら自分は死せる身にひとしいと嘆いてゐる。あらゆる歡喜を拒絶し、最愛のものすら捨てて今日のむなしさを月光に寄せた日。次のことき名歌が生れてゐる。

おんみ再びしづかに霧の輝きもて
茂みと谷間とを充たし
遂に今ひとたび

わが魂を全く解きほぐす。

わが親しき野の上に

おんみ優しき力ある輝きをひろぐ。

そはわが運命の上にひろがる
友の眼ざしにも似たるかな。

樂しかりし時の、また悲しかりし時の
あらゆる名残りの音を思ひ出で、
喜びと惱みとのあひだを揺れつ
わが心ひとりさまよふ。

流れ行け、ひたすらに、流れ行け、野のな

がれ！
わが心もはや樂しきとき無からん。
愛の戯れ言も口づけも消えて跡なし
誓ひける戀のまことも。
……………

(An Mond) 1.2.3.4 Verse

寂寥の極みにこの天衣無縫の詩があつた。

狂へるタツソオがレオノーレの胸にしづかに安らはんことを願つたやうに、彼もまた月光のごとき愛を求めてかの夫人へ赴いた。そして再び煩瑣な生活にひき戻される。無論、ワイマールの公的生活は、彼にとつて受動的奉仕ではなかつた。あらゆる部門に彼の積極性が、それも肉體からぢかに發散する天才の息吹きを伴つて周圍を攪亂し包攝してゐた。公的生活は創造的な私生活と別個のものではなかつた。彼は絢爛たる自己の才能にわれとわが身をさいなみ、酔ひしれてゐるかにみえる。

詩人は、藝術家は、綜合的人間としてあらゆる部門への關係に生きねばならぬと云はれるが、こゝで、はげしい確たる社會觀を、高度のヒュマニズムを求める今日の詩人を想起してみよ。ある場合には實行運動のために詩をさへ犠牲とする。いかに我々はさういふ日の歌はざる詩人を誇つたことであらう。敗北した時でさへその日の痕跡を深く愛してやまなかつた。けれども、容易ならぬ問題がこ

こには在るのだ。人はいつか神の審問をうけねばならぬ。

「御身はヘラスの子か、それともかのヘブライ人の使徒か。」傳統にことよせて私はかやうな審問を云々してゐるのではない。錯雜したけふの社會が自分達に強ひる感情として、この審問を自らに放つてみるがいよ。たとへば――

(1) 「多數の農民が讀み書きを覺え、司祭の云ふことをきかなくなつたなど何事でもない。ルナンやリトレのやうな人物が大勢生活でき、かつ傾聴されるといふことがはるかに重要です！ 我々の救ひは今日ではたゞ正當な貴族のうちにあるのです。」
(フロオベル)

(2) 「できることなら（それは非常に望ましいのだ）讀み書きさへできる百姓なら理解のできるやうな言葉で書くことだ。」
(トルストイ)

何といふ激しい相違であらう。ギリシアの文化を奴隷の上に樹立されたとして、あゝいふ文化存続のためには、また精神的貴族といふ少数者生存のためには、幾萬の奴隷すら意に介しないフロオベルと、奴隷の救済や啓蒙のためにはペーフトオゾンスへ無用と斷じたトルストイと、彼らが終局的には「神々の饗宴」に參與する貴族といふ點で一致したとしても

實に無限に異なる道があるではないか。民族や國情や傳統や資質の相違を云々することは出来る。しかし、異常な魅力をもつてのしかゝつてくるこれらの精神を、錯雜混沌極まりない事情の上で同時的のうけとめる我々東洋人にはすべてが重荷となる。我々は彼らの背景の奥行きを熟知することなしに、たゞ背景が彼らに課した罪禍的美しきのみを惱まされる。そしてそれを自らの罪禍のごとく擔ふのだ。一つのために他を拒絶しえないほどに、我々は茫然たる探求者であらうか。

理想の美と完き合理性と、それを自律的に索める眞の睿智はギリシア人のものだった。然るにキリスト教的精神においては、何よりもまづ良心の嚴正、苦行と神への奉仕、民衆の救済と啓蒙がある。藝術はそれに奉仕する、ヘレニズムとヘブライズムとの對立交流など負しい知識で論じられる筈もなく、この國の傳統にも存在しなかつた問題ではあるが、あまりに異質的な外國文學を支離滅裂に享受する結果が、つひにこの問題を茫然としてあるが切實な感情として内部に誕生せしむるに至る。尤も初めは、殉教者か異教徒か、政治的實踐者か詩人か、こんな對立を自己の實生活から思ひつき、甚だ素朴にそれを苦しむ。が、様々な文學にふれて、この原始的感情は、觸發され、訓練され、成長して、遂には離げながら、かの二大潮流に結びつかうとする。ロシア文學から、例へばゲエテに

眼をむけた刹那、あまりにも異教的、ロシア文學の生む數々の殉教やキリスト教的求道精神とはあまりにも相反する異教的審美精神にぶつかり、全く眩惑されてしまふ。そして、この眩惑から異教的審美精神に近よらうとする試みは、無限の相剋を我々の心に齎す。

美の最も成熟し爛熟した姿に憑かれ、そこに感蕩するものは、自己の明日的存在などを考慮しない。タツソオはエルテルのごとく一種の類虐派である。公女レオノールの胸に抱かれて死せんことを願ふタツソオにとつて、アントニオの廣い人生智など何ものでもなかつた。「努力が長い間かゝつてもやり遂げ得ない事を、愛は一瞬間に仕終せる」といふこの愛は肉體的な息吹きのように地上的であり、何の功利も目的もなく無限に美しく陶酔であつた。ギリシア的理想そのものは、「タツソオ」の最後の場面的ごとく、實際家と詩人との見事な彫塑的協同であつたにしても、かゝる事情の實現から限りなく隔てられた後代人は、まづタツソオの狂氣によつてギリシアを求めたのであらうか。

然し美とは一體何であらう。人類の未來を考へ、奴隸の救済に心を痛め、一歩行爲の世界へ赴いたり、そのために詩を捧げることが果して魔神の退化であらうか。晩年のトルストイや最近のジイドのやうに、原始キリスト教的實踐を夢みることは、ヘレニズムとの絶縁の上のみ成立つのであらうか。いつの瞬

間にか、彼らがこの拒絶の前に、われとわが身の震撼を感じなかつたであらうか。魔神の退化ではない。新しい魔神の誕生直前だと人は云ふかもしれない。が、何によつて誕生は可能であるか。宏大な經濟的知識とあらゆる政治行爲、自然科學の研究、最も熱烈な進歩的思想への關心、社會問題への傾倒。悲しむべきことには、これらのすべてをもつてしても詩は必ずしも詩となるとは限らないのだ。

「正義」の名において詩を審判することは出来ない。誠實と眞面目をもつてすらなほ然り、いかにも熱烈なヒュマニストであり、キリストの實踐者であつても、彼が藝術的完璧を意志する限り、これらのすべてに何か加はらねばならぬ。「何か」の誕生が必須である。詩人はこゝであまりにも峻烈な審判に堪へなければならぬ。

フリーデリケ・オエーゼルへの書簡(一七六九年)の中で若きゲエテはかいてある。

「美とは何ぞ？ 美は光に非ず、夜に非ず。薄明なのです。眞實と不眞實とが産めるもの、一の間物です。薄明の國に、岐路が極めて不確實に、曖昧に存してゐるので、哲人中のヘルクレスの如き人も、掴み損ねるかも知れません。止まませう。私がこの題材に來ると、餘りに奔放になりますか？」

ワイマール十年間の生活において、ゲエテは得たところのもののだけ、喪つたものがあつた。喪つた、その感じが既に重大である。一國の政治を分擔し、そこに生きる民々の幸福を増進すべく働くこと、人類の黄金時代を未來にわたつて夢みること、こんなすばらしいことはあるまい。個人はそこで何ものでもなかつた、あらゆる意味で高貴な協同こそ最終のものである。熱烈なこの夢を實現するためには、詩人たることをやめ、キリストの鮮血を注ぐことを辭すまい。頭腦が亂れ、自意識の汚濁を感じる日、私は一番單純明快なこの理念に憧れる。そしてすべてのデカダン、美に惑溺するもの、エルテル||タツソオの狂氣を憎惡し彼らを剿滅しなければならぬときへ思ふ。プラトンのごとく詩人を追放する日

を思ふ。けれども、この決意は、屢々鼻もぢならぬ教説と、功利性を隨伴する。その危機を不斷に超克しなければならなかつた。詩の喪失が、自己合理化として、誠實な阿呆を生む場合がある。屢々それを目撃した。どんな教説も理論も功利性をふくまぬ。云はば戀人の息吹きのやうに純粹な美に盲目であつていゝだらうか。人の心をとらへて離さぬものは、むしろ意味も目的もないこの美しきでなからうか。エルテルやゲエテの見事な戀愛詩を、蒙昧の民のごとく蹂躪することが出来るだらうか。實に、いづれかにおいて、人は何かを

拒まねばならぬ。あらゆる形態の美は、自己の尊嚴の故にこれを要求する。

ゲエテのごとき青春は再び歌に歸らない。社會問題の嚴然たる強制が、戀愛と薔薇の花を無慙に散らしてしまつたと考へられる。しかし、こゝにも一つの安心がある。青春の午後における情熱の衰微、率直な感動の喪失・詩を失つたものの自己辯護が、かくされてある。詩を失つたヒュ머니スト、これは一個の冷血漢、救世軍の説教師以外の何ものでもあらうか。たゞ彼の進歩的外觀が、世俗において彼を救つてゐるにすぎぬ。ワイマールのゲエテにこの種の優越感など絶無だつた。多面的生活者として勝利した日にさへ、魔神の退化は彼の絶望を意味した。彼はそのとき、まづ公衆を拒絶し、すべての所有を放棄し、最愛のものすら捨てて、自己を襲つた運命に關して深く冷靜に考へた。「ファウスト前戯」にみられる詩人の悲痛な叫びがすべてを物語つてゐる。

その頃わたくしは何も持つてゐずに満足してゐた。

眞理を求めると同時に幻を愛してゐたからです。

どうぞわたくしにあの時の欲望、あの時の深いそして多くの苦痛を伴つてゐる幸福、

あの時の憎の力や愛の力を、耗らさずに返

して下さい。
わたくしの青春をわたくしに返して下さい。

哀願と悔恨にみち、底にある怒りを藏してゐるこの調べこそ、ワイマールの舞臺に最も華かな噴采を浴びてゐた日の苦痛でなかつたらうか。狂氣が彼を襲つた。しかも、エルテル時代のやうな孤獨な彷徨のうちにはなく、ワイマール宮廷といふ、より廣い社交と實務と、云はば人々の中において爆發したであつた。タツソオは宮廷詩人であつた。タツソオを、向上せるエルテル (H. v. Arnim) と呼ぶのは正しい。エルテルを「疾風怒濤の時代」の狂氣であるとすれば、タツソオは青春の午後の狂氣、青春の一時にせよ傾き、情熱が政事に埋れ行かんとする時の、第二の青春を索める狂氣だつた。そして問題は、ゲエテがいかにしてこの狂氣を魔神の招待にまで轉化させて行つたかにある。イタリアへの「逃走」はその試みであつた。大きな作品のすべては、斷片のまゝ彼地へもたらされた。再生の希望はイタリアにあつた。信仰の薄きを嘆く多くのキリスト教徒達が、棕櫚の小枝を携へて聖都エルサレムへ向ふやうに、詩神に見放されたものはいづつか美の聖都ローマへ向ふ。

A 漂泊者(古代的・近代的)
古代的

峠——(Branner)

ローマこそすべてであつた。情熱が沈滯し、故郷の空氣が息はしくなり、絶望のうちを日を送る詩人達はいつかはローマを訪れる。かの古代の廢墟に洗禮をうけたならば！唯一最終の希望にして且つ最も苛烈な試煉への誘ひ。歡喜と苦惱のあまり、死を想ふことなしにローマを夢みることは出来ない。「暗澹とした情熱の都ローマ」而して、ゲエテの憧憬はいかに長い間みたまされずにあつたことだらう。

「イタリアへ！ランゲル君、イタリアへ！但し明年といふ譯ではありません。僕にはそれでは早過ぎます。まだ必要な知識がありませんし、まだまだ澤山足らぬものがあります。パリが僕の豫備校、ローマが大學となるべきです。これぞ眞の大學だからです。一度それを見てしまへば、萬物を見たわけなのです。ですから僕も急いで出かけません。」

この手紙がかかれてからちやうど十五年後の秋、はじめて彼はイタリアへ急いである。「疾風怒濤の時代」を過ぎて、いかに自己統御を學び、多様な生活へ身を委ねたか、その

情景と危機については既に述べた。むしろワイマルこそ一個の豫備校であつた。彼の絶えざる欲求はもはやこゝでは充たし難く、一つ飽和點に達し、自己統御は自己崩壞の危機に直面した。それを明らかに自覺したとき詩人はローマへ急いだ。迷へるもの、充ち足りぬもの、詩神より追放された嘆きを知るもののみが彼地へ誘はれる。ローマへの思慕は詩人の祈禱であり、旅はその巡禮であらうか。すべてを、高貴な社交も友情も、戀人すらも捨てて彼は峻烈な高山の前に立たねばならぬ。「己は亡命者、宿無し、己は當もなく休まずに生きてゐる人非人」——グレットヘンと別れる日のファウストは告白する。彼の熱烈な人生探求家の態度は、いまや詩を求め、永遠の青春を呼ぶ性急な美の探求者としてあらはれる。「ウル・ファウスト」にみられるやうな荒々しい錯亂、髪ふり亂した狂氣はここにない。しかし、それを内部分かく抑へ、飛躍の動機をねらつてゐる。またしても兇暴な巨人主義が頭をもたげたのだ。絢爛たるワイマルの生活をもはや彼は冷淡に眺める。「美しい避間よ、しばし待てー！」(Verweile doch, du bist so schön!)といふには未だ早かつたのだ。

であつた。清澄な空氣、高く晴れわたつた空、黄金のやうなレモン色の樹、多彩にして古代の面影を傳へる異郷への夢。そして當然のことであるが、この夢のうしろには容易に逃れられぬ故郷の煩はしき、故郷への憎惡すらがある。一七八六年九月三日の早朝、美しい霧の中を、ゲエテは一臺の郵便馬車に乗つてカールスバート去つた。彼の行先は何びとも告げられなかつた。充ちあふれて遂には苦痛となつたイタリアへの憧憬と、過ぎし日の想ひ出を抱きながら、一路アルプス山系に向つて急いだ。それはまさに「逃亡」であつた。未だ見ぬ國の夢に憑かれ、心は研ぎすまされてゐた。ハイネが云つたやうに、今やイタリアは自己の姿をよく知るために天來の鏡を迎へるやうなものだつた。

美しい大地がみつから回轉してゐる。天國のやうな明るさと、深い、恐ろしい夜とが交代する。巖石の壘み成せる深い底から幅廣い潮流をなして海は泡立つ。その巖も海も、永遠に早い軌道の歩みに引き入れられて、共に廻るのである。そして海から陸へ、陸から海へ、暴風は怒號して往き、怒號して返る。その往いては返る競争で、吹き過ぐる周圍に深甚な作用の連鎖が作られる。ともすれば雷電の破壊の焰が道のゆくてに燃え上る。併し主よ、御身の使徒は御身の世の穩やかなる推移を敬つてある……

壯麗な天地よ。九月八日、大アルプス山系